

大学史特集展 28

總持寺の近代 と駒澤大学

令和 6 年

令和 7 年

9月30日[月] - 3月21日[金]



はじめに

明治 30 年代前半は、曹洞宗にとって重大な事件・事故が発生した時期でした。最大の出来事は、大本山總持寺の火災とその後の復興・移転の問題、もう一つは曹洞宗大学林における閉林騒動でした。

大本山總持寺の火災は、能登から鶴見への總持寺移転の契機となり、首都東京近郊への本山移転はその後の曹洞宗の発展に寄与することとなりました。

一方で、大学林の閉林は教師と学生の確執を背景とし、曹洞宗の最高学府が一年間にわたり閉林するという深刻な事態でした。偶然にも閉林前後の教職員、学生には後の總持寺住職となる人々が多く存在していました。明治 30 年代前半と總持寺をキーワードに、曹洞宗にとって重大であったこの 2 つの出来事を紹介していきます。

駒澤大学禅文化歴史博物館

1. 總持寺の近代

明治時代の曹洞宗における 1 つの重要な問題は、永平寺と總持寺の両本山をめぐるものでした。明治元（1868）年の永平寺 60 世臥雲童龍（がうんどうりゅう）から政府へ提出された、總持寺の本山職を廃し永平寺を総本山とする改革案に端を発する問題は、明治 5（1882）年の両山盟約により双方を本山とし、曹洞宗貫首は 1 年交代とすることで決着をみました。

しかし、問題の火種は燻り続け、明治 25（1892）年に總持寺が分離独立宣言を出すに至りました。明治 28（1895）年 3 月 2 日付で、両本山住職による告諭が布達され、両山一体不二が確立したことにより、近代曹洞宗教団はようやく新たな出発点を迎えました。

告諭では、両本山が「一体不二の協和に復帰」し、「同心戮力をもって宗門を経綸」すべしとあり、永平寺と總持寺を異なるものとする思いを捨て、心を 1 つにして宗門の振興を図ることが記されました。両本山一体不二の表れとして告諭に前後して、總持寺分離独立問題に関連して警誡された僧侶たちの赦免の条件や、両本山住職の晋山式の挙行なども告げられています。

2. 鶴見移転

(1) 總持寺の火災

明治 31 (1898) 年 4 月、總持寺は大規模な火災に見舞われます。明治 31 (1898) 年 4 月 13 日午後 9 時、總持寺の法堂西側より出火し、中心部の伽藍・諸堂とその内部をほぼ全焼しました。4 月 15 日発行の『宗報』32 号では速報が報じられ、5 月 1 日発行の 33 号では總持寺東京出張所監院であった石川素童（いしかわそどう）による被害状況の報告、5 月 15 日発行の 34 号では長文の出火から鎮火までの様子と焼失物品のリスト、焼失した建物を赤で示した伽藍図が掲載されています。

その後火災からの復興と並行して、東京近郊への移転に関する建白書、請願書が提出されます。明治 39 (1906) 年には永平寺が移転に賛同し、その後のさまざまな議論や反対運動を乗り越え、移転先は横浜市鶴見に決定し、明治 44 (1911) 年までに移転が完了、同年 11 月 5 日には移転式が催されました。

(2) 總持寺の鶴見移転

總持寺の移転に関する議論は、実際は火災以前から存在していました。その背景には、明治 3 (1870) 年の輪住制から独住制への移行による出世転衣料の消失、廃藩置県による加賀前田家からの支援の打ち切りなど経済的基盤の弱体化がありました。経済基盤の強化のためには、首都東京近郊への移転が必要とされました。

明治 36 (1908) 年現在の總持寺の地には成願寺という広大な敷地を有する曹洞宗寺院が存在しました。当時成願寺住職の加藤海応（かとうかいおう）と本山の栗山泰音（くりやまたいおん）は旧知の関係であり、一部境内地寄進の話が湧き出ると好意を以て快諾されました。明治 39 (1906) 年には永平寺が移転に賛同し、同年末には石川県知事の斡旋により能登の地元住民との合意を得られています。翌 40 (1907) 年には移転先が鶴見に決定し、同 44 (1911) 年までに移転を完了、同年 11 月 5 日には移転遷祖式が催されました。

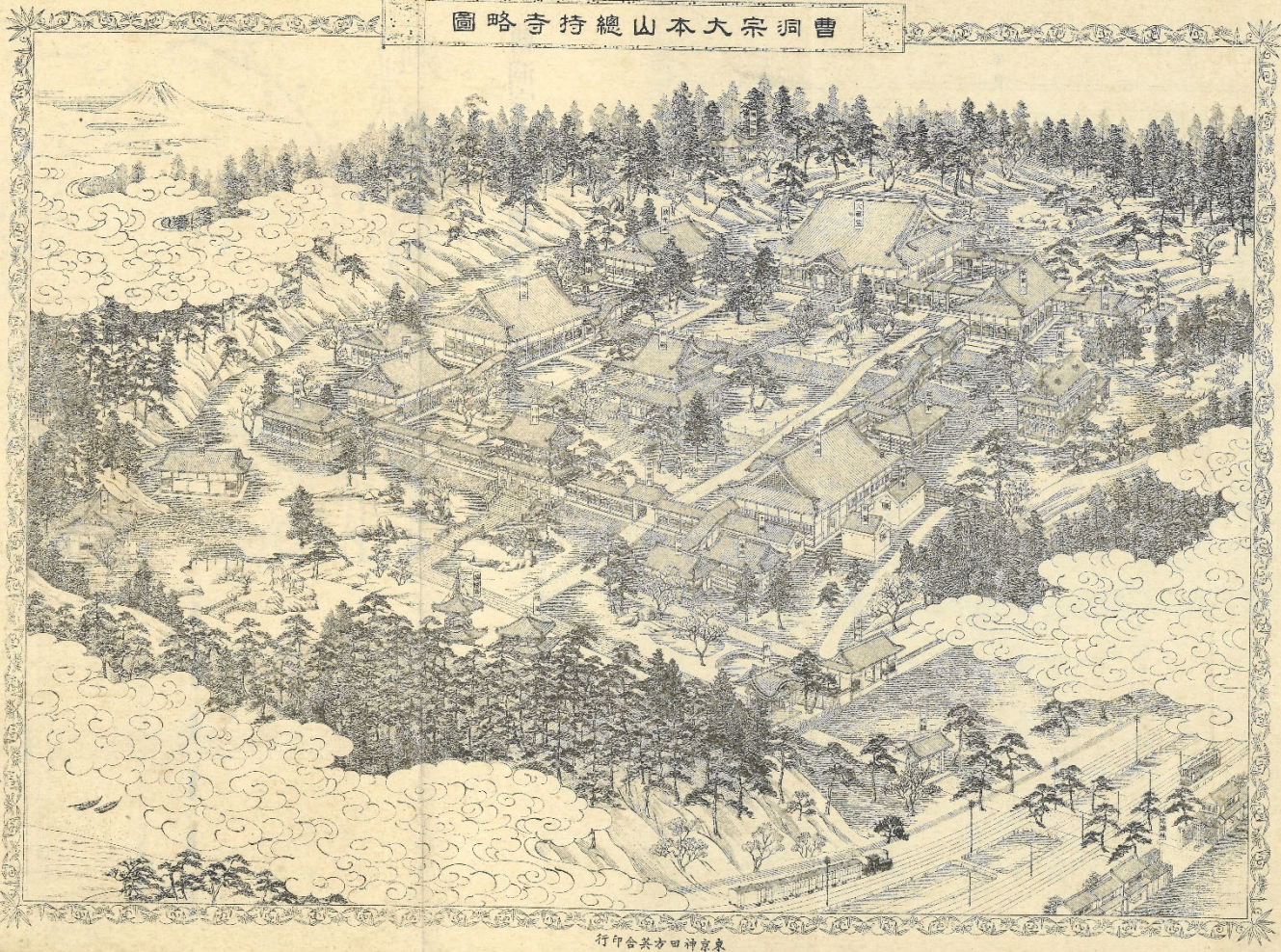


左.絵葉書 大本山總持寺遷祖式十境吹上堀前參詣群集の圖



右.絵葉書 鶴見大本山總持寺遷祖式 (白字溪)

曹洞宗大本山總持寺略圖

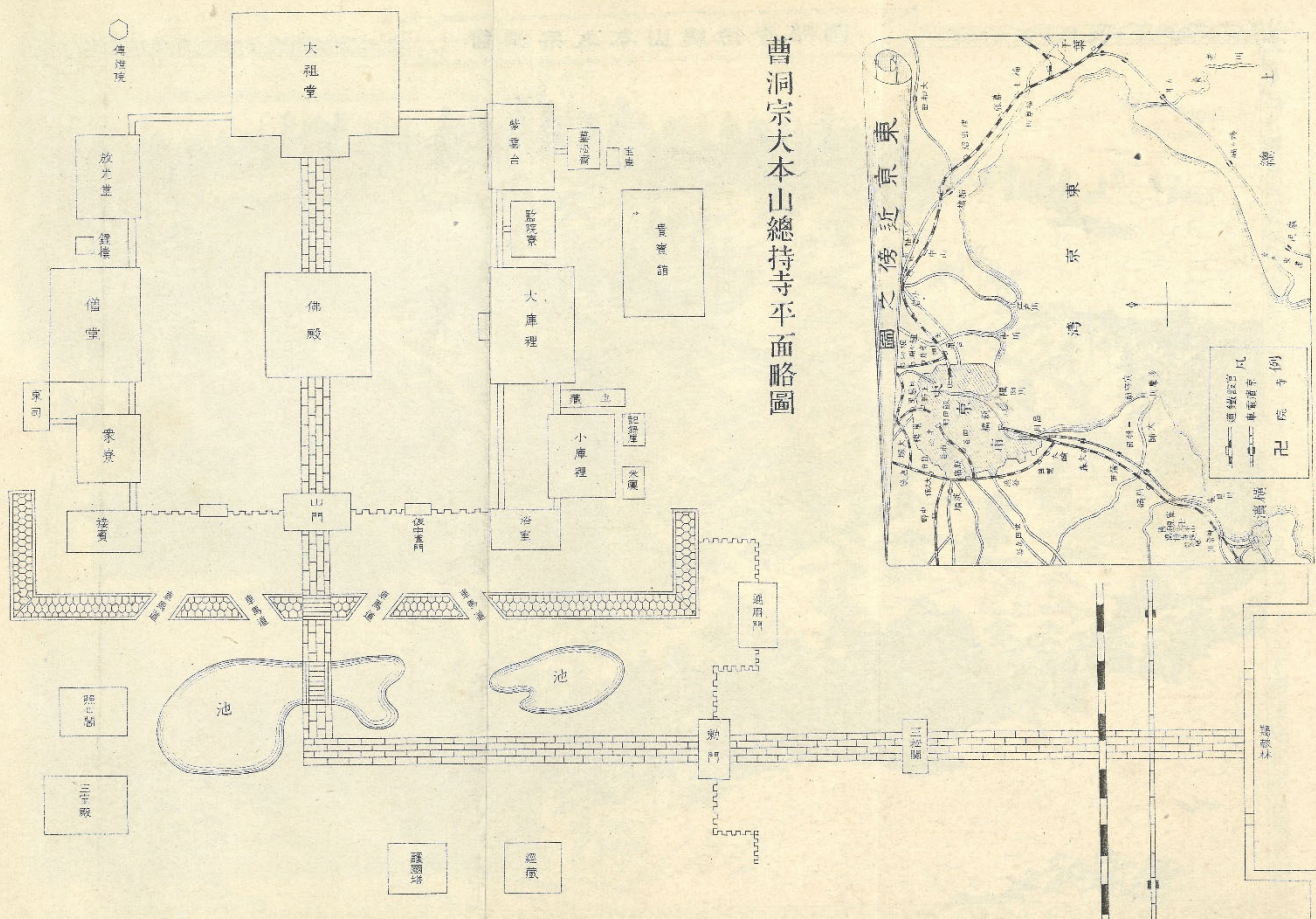


行印合共方田神京東

↑ 曹洞宗大本山總持寺略図 『大本山總持寺再建の話』 建設予定図

↓ 曹洞宗大本山總持寺平面略図 『大本山總持寺再建の話』 建設予定図

曹洞宗大本山總持寺平面略圖



3. 明治 30 年代の本学と總持寺所縁の人物

總持寺の火災が発生した明治 30 年代前半の本学は、明治 32 (1899) 年末から明治 33 (1900) 年末にかけて、教職員と学生の確執を契機とした休学閉林の時期にありました。

明治 33 (1900) 年末に再び開林する際に新たに赴任した教職員の中には、後に鶴見移転後の總持寺住職となる大森禅戒（おおもりぜんかい）がおり、学生の中には同様に後の總持寺住職となる高階瓏仙（たかしなろうせん）、弧峰智燦（こほうちさん）もいました。

○大学林の休学閉林

曹洞宗大学林専門本校時代には、幾度かの閉林事件が起こりました。その多くは教職員と学生との衝突が原因で、明治 22 (1889) 年 1 月から 23 (1890) 年 4 月、明治 24 (1891) 年 4 月から 9 月などは長期化した例とされます。

明治 32 (1899) 年末の閉林は、学生たちが本校教頭筒川方外（つつがわほうがい）と事務学監丘宗潭（おかそうたん）の不信任上申書を曹洞宗宗務局に提出したことに端を発します。本校側は、学生たちに対し、上申書の取り消しと反省を促し、従えない者に退林を命じたことで、学生たちはより態度を硬化させていきました。この騒動の顛末は、青松寺住職北野元峰（きたのげんぼう）らの仲介により学生たちは休学扱い、本校側は当分の間授業を休止する調停案で決着をみました。

・大森禅戒

休学閉林の折に大半が辞職した教職員に代わり明治 33 (1900) 年末の開林時に着任した教職員の一人です。大正 2 (1913) 年から同 9 年曹洞宗大学学監、昭和 9 (1934) 年から同 12 年駒澤大学学長を務めました。また、昭和 16 (1941) 年に總持寺独住 11 世となり、同年永平寺 70 世に転じました。

・高階瓏仙

明治 32 (1899) 年末の不信任上申書に大学林 3 年級監として署名がみられます。3 年級生は教頭の正法眼蔵の講義へのボイコットを申し出ていることもあり、当件への関わりは深かったとみられます。明治 42 (1908) 年以降、断続的に曹洞宗大学教授を務め、昭和 16 (1941) 年總持寺独住 12 世、同年永平寺 71 世に転じました。昭和 16 (1941) 年に永平寺を辞し、曹洞宗後任管長となり示寂する昭和 43 (1968) 年まで管長を務めました。

・弧峰智燦

明治 30 年代に学生時代を過ごし、後に總持寺独住 18 世となった人物です。

明治 37 (1904) 年本学の最初の図書館係となり、その後、本学教職員、和融社編集長、曹洞宗第一中学林の教頭、林長を歴任し、昭和 32 (1957) 年に總持寺独住 18 世となりました。

大学史特集展 28・リーフレット
總持寺の近代と駒澤大学

2024 年 9 月 30 日